温泉科学（J. Hot Spring Sci.），71，186-199（2021）

資　　料

―ある湯河原温泉史―
湯河原温泉懐中湯たんぽ

大　山　正　雄[1)]

（令和3年8月3日受付，令和3年9月28日受理）

―A History of Yugawara Hot Spring―
Yugawara Hot Spring Pocket Hot-water Bottle

Masao Ohyama[1)]

1.　はじめに

昭和30（1955）年代頃まで，冬の寒い時期になると多くの家庭では夜寝る時に湯たんぽと称するラクビーボールのような平たい容器（図1）に2L程のお湯を入れて，それを布にくるみ，あるいは袋に入れ，布団の中の足下に置いて暖を取るのに利用していた．

その後，湯たんぽは電気毛布や電気行火（あんか）の出現によって廃れたかのようであったが，最近になり再び冬場の手軽で安価な暖房器具として人気が出て来た．試算によると，その費用は東京都内の一般家庭なら2Lの水道料金と下水道使用料とで約0.6円，東京ガスによる15℃の水2Lを沸騰させた場合のガス代が2.3円で，1カ月使ってもわずか約86円ですむという（毎日新聞2008年1月21日号夕刊）．

平成10（1998）年の夏，湯河原温泉の岩本屋旅館（明治40（1907）年頃創立，図2）に訪れた時，三代目館主の岩本昭司（1931-2018）氏は「昭和15（1940）年頃まで『温泉懐中湯たんぽ』と称するものを当館が製造・販売していた」と語っていた．

この温泉懐中湯たんぽは直径10cm，厚さ2.5cmの金属製の円筒状容器（図3）に湯河原の温泉水を詰めてから，はんだで密閉されたものである．使用する時はこの容器を熱湯に入れて温める．そして，ウコン（ショウガ科の多年草）染めした黄色の木綿布袋に入れて赤い毛糸で縛り，腹部や必要部分にあて，暖による効果をねらっている．それに一度あたためるとなかなか冷めないといわれていた．

本論では湯河原温泉の明治時代以降の急速な発展の経過とその過程で生まれた温泉懐中湯たんぽについて紹介する．

[1)]一般社団法人日本温泉協会　〒102-0093　東京都千代田区平河町2-5-5 全国旅館会館．[1)]Japan Spa Association, 2-5-5, Hirakawacho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-0093, Japan.　E-mail msooyama@ric.hi-ho.ne.jp, TEL 0465-47-4072.

図 1　湯たんぽ．左より，トタン製，陶製（沼津市歴史民俗資料館）

図 2　湯河原温泉場と岩本屋旅館（2006 年 著者撮影）

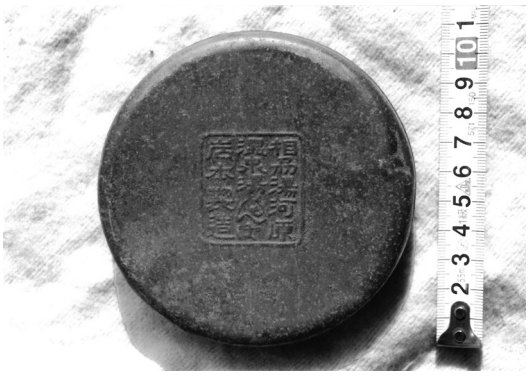

図 3　湯河原温泉懐中湯たんぽ
容器は直径 10 cm，厚さ 2.5 cm の円筒形．
表記『相州湯河原 温泉湯たんぽ 岩本製造』

2.　湯河原温泉の歴史地理的概要

湯河原町は静岡県の熱海市と接する神奈川県西端に位置し，北西を箱根山，南東を相模湾（太平洋）に開口している湯河原火山の標高 600～1000 m の外輪山に囲まれた開析カルデラと箱根火山東麓，および海岸沖積地を町域（面積 40.7 km^2）としている（図 4）．

湯河原火山は隣接する西の熱海の多賀火山より新しく，北の箱根火山より古く 65 万年前頃の活動（山崎，2000）と考えられている安山岩よりなる円錐形の成層火山である（久野，1972）．その中央火口は著しく開析・拡大されたカルデラ状低地となり，中央部を東に流れる藤木川（落合橋下流から千歳川）が湯河原火山の基盤をなす湯ヶ島層群を温泉場で露出させている．湯ヶ島層群は 1600 万～1000 万年前の海底火山の玄武岩や安山岩から成る海底堆積物の緻密な地層である．湯河原温泉の大部分はこの湯ヶ島層群のき裂に胚胎し，無色透明の 90℃近い温泉を湧出している（大木ら，1963）．

湯河原は江戸時代には土肥 6 ヶ村（宮上，宮下，門川，城堀，吉浜，鍛冶屋）と称していたが，明治 22（1889）年 4 月の町村制により湯河原カルデラ内の宮上，宮下，門川，城堀の 4 ヶ村が土肥村となり，大正 15（1926）年 7 月に湯河原町，昭和 30（1955）年 4 月 1 日に海岸沿いの吉浜町（吉浜と鍛冶屋），福浦村とが合併して現在の湯河原町が誕生した．

今から約 1300 年前の奈良時代（710～784）に編纂された『万葉集』十四巻東歌に「足柄（あしかり）の　土肥の河内に　いづる湯の　世にもたよらに　子ろが言はなくに」が記されている．この一首は万葉集約 4,500 首の中で温泉が湧き出る様子を歌った唯一のものである（熊澤，1968）．湯河原地方はその頃から土肥と呼ばれていた．土肥郷の中の一つが下記 3 温泉の自然湧出していた宮上村である．

湯河原の地名は湯（温泉）が藤木川の河原に湧出していたことに由来すると考えられるが，記録の上では「宮上村明細帳」の寛文 12（1672）年の記が初見である（湯河原町町史編さん委員会，1987）．

図 4　湯河原町（2001 年 1 月 著者撮影）

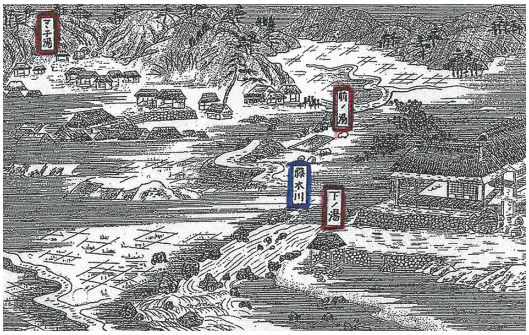

図 5　江戸天保年間（1830～43）の湯河原温泉
（新編相模国風土記稿，1842 年）

江戸時代後期の天保 12（1842）年に完成した地誌『新編相模国風土記稿』（蘆田，1980）によれば，天保年間（1830～43）頃の湯河原温泉は海岸から 4 km 程入ったカルデラ底中央の宮上村を東流する藤木川の河原に自然石で設けられた浴槽の“前ノ湯”と“下ノ湯”，右岸側の山の麓の天然の窪地をなす巨石を浴槽とする“ママ子（ネ）湯”の 3 湧泉（図 5）のみであったが，今日では海岸沿いでも温泉が開発されて廃孔と休止源泉を含めると 2020 年時点で 194（利用 78，未利用 34）源泉に達している．

なお，ママ子湯（ままねの湯）は後に“上の湯（こごみの湯）”，前の湯は“中の湯”とも称している．また，ママ子湯は明治 19（1886）年発行の「日本鉱泉誌 中巻」（内務省衛生局，1985）によれば儘根ノ湯と記されている．ママが南関東で広く使われている崖や急斜面を意味し（山中，1978），子（ネ）は根元も意味することから，ママ子湯とは崖下に湧いている温泉に由来する名称であろう．

湯河原温泉は古代から，そして，その効能は金瘡（きんそう（刀傷など））に特に著しく，打撲・損傷・化膿などにもよく効くと中世には知られていた．戦乱のたびに負傷した将兵がやってきて治療し，鎌倉時代から最高級石とされる隣接する真鶴の小松石や小田原の根府川石の採石場などで働く近在の石工が怪我をした際の養生にも欠かせなかったという（湯河原町町史編さん委員会，1987）．

江戸時代には湯河原温泉を江戸に四斗（しと）樽（約 72L）に詰めて熱海港から海路で送られていた．江戸時代後期の文政（1818～29）の頃には神田，浅草，京橋，赤坂などでの 12 店で薬湯として販売され，店の入口には「湯河原湯」といった看板を掲げていた（熱海市史編纂委員会，1968）．そして値崩れを防ぐため，湯河原温泉の薬湯は宮上村の亀屋源次郎が一手に取り扱うことを宮上村湯河原の名主と江戸商人との間で文久元（1861）年に取り決めている（湯河原町町史編さん委員会，1984）．

全国の温泉地を格付けした江戸時代の文化 14（1817）年発行の温泉番付『諸国温泉効能鑑』（図 6）によれば，湯河原温泉は江戸より 20 里（約 80 km），“切り傷に吉”とあり，東の温泉番付の草津，那須に次ぐ 3 番目の小結の座を占めていることから，確かに薬湯として評判であったと推察される．

当時の湯河原は，『新編相模国風土記稿』によれば「此の地の温湯・治効は箱根・熱海の泉と伯仲すれど，僻地で山川の景勝も少なく諸事自由にならず，また静かで寂しさに耐えられず遂に飽きて長く留まる者少なし」と評され，しかも海沿いを通る小田原との間の熱海道（往還）の行路が嶮しい上に箱根関所に次いで重要視されていた根府川関所が元和元（1615）年設けられていたので，小田原から江戸方面の人々の湯治を困難にしていた．明治 14（1881）年に熱海・小田原間に県道が完成したが，それでも明治 26（1893）年，この道の様子を記述した陸軍の報告（副島，1896）によると“道路ハ山路ニシテ海濱ニ沿イ，一高一低敢テ険阻ナラサルモ磽确突兀（石多く凸凹）降雨ノ際ハ泥濘（ぬかるみ）甚シク人車ノ交通大ニ困難ナリ”とある．

明治 2（1869）年に関所が廃止され，明治 20（1887）年に東海道本線が小田原の手前（東）の国府津まで延び，明治 29（1896）年に湯河原経由の小田原と熱海との間に人の押す人車鉄道（1907 年に軽便鉄道）が，明治（1900）33 年に小田原経由の国府津と箱根湯本との間に小田原電気鉄道が敷設され，交通の便は少しずつ良くなっていった．

また湯河原温泉は，「全ての傷に特功のあること日本国中之に並ぶものなし」（加藤，1895）とのかねてからの評判と温泉の湧出する湯河原火山カルデラが暖流（黒潮）の流れる南東の相模湾（太平洋）に向かって開口して冬期の気候も温暖なことから陸軍の傷兵の療養に利用されたので名を一層高めることにもなった．ちなみに陸軍転地療養所での測定によると，明治 41（1908）年 12 月から翌年 1 月の 2 ヶ月間の湯河原の平均気温は 9.7℃で，東京における同期間の 3.1℃と比較すると平均 6.6℃も暖かい（牛山 1910）．

図 6　温泉番付『諸国温泉効能鑑』
江戸文化 14（1817）年版抜粋

3.　湯河原温泉の利用

湯河原では温泉場を湯場，温泉宿を湯戸，商店を商戸と呼んでいた．湯戸の主は農業を本業とし，温泉宿を副業として自宅の一部と炊事場を貸与していた．湯戸には旅館としての設備はなく，浴客が各自で米や味噌を持参，あるいは御用聞きに来る漁夫や商人から食料品や寝具類などを調達して自炊湯治をするのであるが，湯戸に求めば煮炊きをしてもらうこともあった．浴槽は外湯の露天である．

明治時代になると，湯治客の増加に伴い湯戸の主は農業をやめて温泉を本業とするようになった．ママネ湯付近を中心に温泉宿が新築され，今まで藁葺きであった湯戸の屋根は次第に瓦屋根となり（図 7・8），温泉開発も行われて内湯も備わるようになった．また，湯河原に初めて 2 階家の温泉宿が明治 20（1887）年頃に建ち，それが珍しく二階家（屋）の通称を屋号とした．寿荘（図 2）の前身である．こうして温泉旅館としての整備が急速に進み，江戸天保年間にママ子湯の箇所に 4 湯戸，下ノ湯に 2 湯戸の計 6 湯戸が，明治 43（1910）年には伊豆屋，箱根屋，上野屋，亀屋，富士屋，藤田屋，天野屋，二階屋など 18 旅館となった．なお，湯河原の老舗の旅館は名に“屋”号を持ち，

図 7　明治 28（1895）年発行の湯河原温泉図抜粋．ママネ湯は左端下（岩本屋 蔵）

図 8　明治 43（1910）年発行の湯河原温泉図抜粋．ママネ湯は中央上（上野屋 蔵）

図 9　自噴泉時代の浴槽．湯面は地表下約 2 m．奥左端は湧出口．（2021 年 著者撮影）

図 10　湯河原での陸軍療養患者の送迎．日露戦争時，「写真が語る湯河原今昔」編集委員会（1976）

ままねの湯に隣接する伊豆屋旅館（江戸末頃創業）の八亀広蔵（1905-1983）社長が 10 歳頃（大正初期）に古老から聞いた話によると，自噴を利用していたので風呂場は全て地下に設けられていた（八亀，1983）．例えば，大正期頃からのままねの湯旅館の浴槽の湯面は地表下約 2 m である（図 9）．

湯河原温泉発展の契機ともなった東京陸軍予備病院の東京第一衛戍病院転地療養所が各旅館の客室を借りて開設（高橋，1913）され，明治 27～28（1894～95）年の日清戦争時の明治 28～29（1895～96）年に 1,206 人，明治 37～8（1904～05）年の日露戦争に明治 37～39（1904～06）年に 4,806 人を療養（西川，1932）している（図 10）．温泉場は傷病兵が点々としてぶらつき，白い服の看護士を見かける光景を呈していた．

第二次世界大戦時には横須賀海軍病院の分院に天野屋，上野屋，伊藤屋，藤田屋，山翠楼など約 17 軒の温泉旅館が昭和 18（1943）年に接収（高城，1986：湯河原町立図書館，2013）されている．

海軍病院の入院患者数は太平洋戦争開戦の昭和 16（1941）年の約 6,000 人に対し，終戦の昭和 20（1945）年は約 36,000 人に達している．これに対処するために佐世保，舞鶴，呉などの海軍病院は日赤病院の借用 24 カ所，雲仙，三朝，城崎などの温泉旅館に分院・分室 66 カ所を新設した．温泉地の中で湯河原の病床数は最も多く 2,000 床である（三枝，1993）．急増する傷病兵を収容できたのは戦局の悪化で温泉旅館が経営困難になり，施設の提供が得られたためでもある．

戦後も横須賀海軍病院の病棟に接収された富士屋旅館（図 11）の一部を借りて湯河原整形外科診療所として出発（昭和 21 年 2 月）した湯河原厚生年金病院（現・JCHO 湯河原病院）は新設（昭和 26（1951）年 2 月）の病院施設（湯河原厚生年金病院 50 年史編集委員会，1996）でもリハビリなどの水治療に温泉を利用（図 12）していた．

上述の岩本屋旅館の温泉の効能書きには「打ち身，切り傷，火傷，骨折の仕上げ，花柳病，皮膚病，神経痛，リューマチ，婦人病，痔，盲腸炎手術後，その他」と記されている（図 13）．かつて宿泊客は主に農閑期の農夫，病後療養や大火傷をした人で，行楽客はほとんどいなかったという．宿泊数は 3 日から 1 週間である．筆者は「湯河原温泉に手術後の傷の療養に来たら，効き過ぎて傷口が盛り上がってしまい手術をし直した客があった」という話を天野屋旅館（明治 8（1875）年創業）四代目の天野弘之館主（1997 年談）から聞いたことがある．

岩本屋旅館は旅館業を始める前の明治 20（1887）年代頃からすでに岩本商店として温泉を販売し，陸送により藤沢や横須賀の薬局に，さらに海送により熱海港から東京や千葉県房総南部にも送っていた．また泉質の良いことが宮内省に認められ，小田原や沼津の御用邸にも温泉を献上していた．

図 11　富士屋旅館旧館　大正 12（1923）年建築．2019 年登録有形文化財指定（2021 年 著者撮影）

図 12　湯河原厚生年金病院の水治療施設（1998 年 著者撮影）

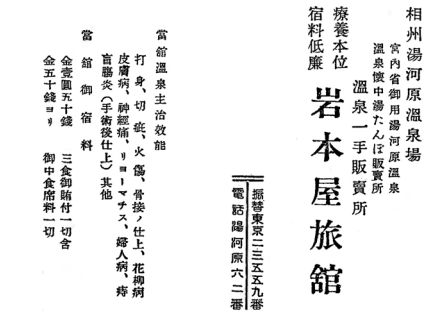

図 13　岩本屋旅館の案内

図 14　湯河原温泉を沼津御用邸に運ぶ馬車（東海道・小田原市内），提供 岩本屋旅館

図 14 の光景は沼津御用邸に滞在中の昭憲皇太后へ御湯献上するため，藁で保温をよくした四斗樽に温泉を詰めて馬車で御用邸に運んでいるところで，場所は小田原市内の東海道（国道 1 号線）沿いに戦国時代から店を構えていた薬屋「外郎（ういろう）」前である．先頭の人が岩本屋旅館初代館主の岩本権太郎（1875–1932）である．撮影時期は大正時代初期（1915 年）頃で，日章旗が立っていることから正月であろう．当時は丹那トンネル完成（昭和 9（1934）年）前なので，四斗樽の温泉は湯河原の源泉から小田原まで約 22 km，国府津駅まで約 30 km を馬車で，そして箱根山北麓を回る東海道本線（現在の御殿場線）で沼津（60 km）へ運ばれていた．

ところで，運搬時間であるが，馬車で時速 4 km とすると源泉から小田原に 6 時間，国府津に 8 時間，列車で国府津・沼津間に 2 時間，御用邸は沼津駅から約 4 km なので馬車で 1 時間とすると合計 11 時間である．板寺（2021）は，江戸時代，徳川将軍に熱海の温泉を詰めた四斗樽を男衆が担いで運んでいたことから江戸到着までの湯の温度低下を試算し，樽からの放熱により時間の経過と共に湯の温度が指数関数的に低下する状況を示している．その結果を借用すると，後述する“ままねの湯”の源泉での温度 74℃を出発点とすると，6 時間後の小田原で 51℃程，11 時間後に 38℃程なので沼津でも沸かすことなく薬湯に浴せそうである．

4.　湯河原温泉の変遷

温泉井の掘削と管理も行っていた井戸倉建設会社会長の加藤福松（1909–2006）氏（1997 年談）によると，岩本屋旅館が販売していた温泉は，宮の上共有温泉「ままねの湯」（図 15）の温泉水だと言う．口碑によると白鳳 2（663）年，加賀金沢の人，二見加賀之助という者がこの地に来て留まり，土地開墾の傍ら霊泉に浴し，100 余年の長寿を保ったと伝えられて（足柄下郡教育委員会，1972）いる．その湯はままねの湯と考えられている．なお，二見加賀之助の墓はないが，位牌が宝徳 3（1451）年に開創された千歳川右岸側の熱海市泉の曹洞宗天寿院に安置されている．

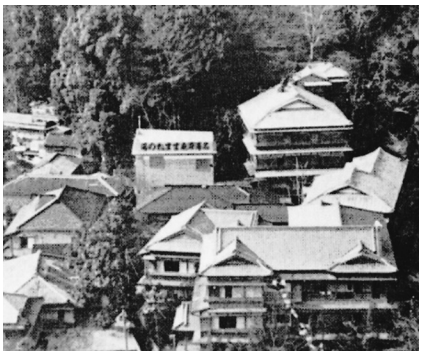

図 15　昭和初期ままねの湯の施設（中央奥），右は上野屋，前は箱根屋
「写真が語る湯河原今昔」編集委員会（1976）

明治 14（1881）年から始めた内務省衛生局（1985）の日本各地の鉱泉調査によると，「ままねの湯」は温度 55.6℃の自然湧泉であった．しかし，陸軍の療養所に当てられたり，多くの浴客が訪れるようになると自然湧泉だけでは湯量が間に合わなくなってきた．そこで室伏勝蔵（1860–1938）は明治 38（1905）年に湯河原で初めてとなる竹の弓と籤（ひご）を利用した上総堀での掘削が中の湯（深度 54.5 m），次いでままねの湯（51 m）で行い，高温で多量の温泉湧出に成功した．

これによりままねの湯は温度74℃，湧出量毎分27 L の自噴井となり（小林，1914），昭和 6（1931）年 5 月の調査では深度 71 m まで増掘され 76℃，毎分 36 L の自噴を記録している．大正 11（1922）年 12 月の試験によると，泉質は，泉温 75℃，成分総計 2.90 g/L，ナトリウムイオン 0.48 g/L，カルシウムイオン 0.19 g/L，塩素イオン 0.77 g/L，硫酸イオン 0.35 g/L，遊離炭酸 0.81 g/L などの弱食塩泉である（内務省衛生試験所，1929）．

湯河原温泉は，前記したように日清・日露戦争の傷兵の療養などで名声が上がり，湯治客や見舞客も多くなり，温泉開発が活発に行われた．源泉数は江戸時代の 3 源泉から大正 2（1913）年に 18 源泉に，特に，熱海・三島間の丹那トンネルが昭和 9（1934）年に開通したことによりさらに温泉需要の増大を招いた．源泉掘削が昭和 10～15（1935～1940）年にかけて盛んになり，源泉数は約 90 に達した．

江戸東京から湯河原には明治時代初期まで徒歩なので 3 日程要したが，鉄道の整備により明治 43（1910）年頃には東京新橋駅から湯河原駅まで途中，国府津と小田原での乗り継ぎで約 5 時間半（牛山，1910），東海道本線が大正 13（1924）年に湯河原まで延び，昭和 5（1930）年に蒸気機関車から電化されたことにより 2 時間半（湯河原町教育研究会，1971）となった．なお，現在は 2 時間弱である．

年間宿泊者数は明治 10（1877）年代の平均 1,718 人（内務省衛生局，1985）から大正 14 年に 10 万人を越え，昭和 17（1943）年には 47 万人（湯河原町教育委員会，1975）に達した．現在は昭和 45（1970）年に 120 万人，令和元（2019）年に 69 万人，旅館がそれぞれ 165 軒と 105 軒である（湯河原町，2019）．

温泉開発は主に湯河原温泉の発祥でもあるままねの湯（第 56 号）と藤木川の中の湯（第 58 号）と落合橋付近の下の湯を中心に各源泉間隔が数 m から 10 数 m 程と隣接するような状態で行われた（図 16）．このため源泉間の相互影響をもたらし，自噴量の減少や停止を招いた（大木ら，1963）．そこで，昭和 15（1940）年頃から新規源泉は既存源泉から 1 町（約 109 m）以上離れるよう行政指導が行われるようになった．

減少した温泉量の確保のために既存源泉では増掘が行われ，そして動力による揚湯ポンプが用いられるようになった．ポンプは最初タービンポンプ等が用いられたようであるが，湯河原温泉は溶存成分が多いので揚湯管内に付着するスケール（温泉水から析出・沈殿物）除去の容易なエアーリフト（圧搾空気）ポンプに変わった．

エアーリフトポンプはタービンポンプよりもスケール除去が容易であり，水位の低い井孔内からも汲み上げることが出来る利点も持っている．しかし，これらの利点が後の著しい水位低下を引き起こす要因ともなった．昭和 20（1945）年代になると，図 16 に示されるようにままねの湯，中の湯，下の湯だけでなく明治時代以降に開発され，大正時代に自噴していた掘削井の源泉も消え，湧出源泉は全てエアーリフトポンプ揚湯源泉（図 17）となった．

湯河原温泉の総採取量は大正 2（1913）年に 400 L/分程であるが，昭和 6（1931）年に 1,680 L/分，第二次世界大戦後の経済と秩序の回復と共に急増し，昭和 33（1958）年頃に 5,460 L/分（計量源泉 67），昭和 45（1970）年には 6,770 L/分（計量源泉 100）（神奈川県衛生部，1974）と大正 2 年頃の約 17 倍になっている（図 18）．

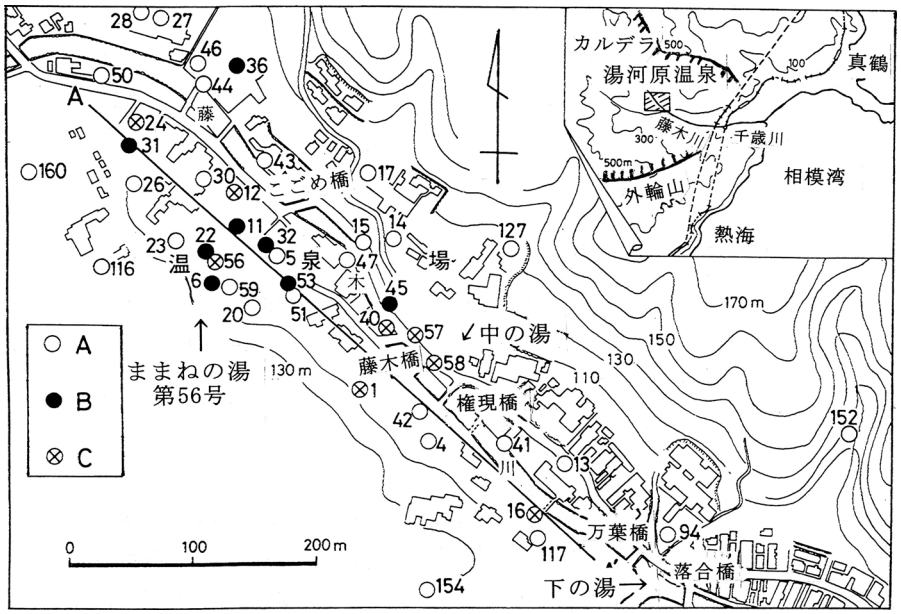

図 16　温泉場の 1973 年頃の温泉源分布，平野ら（1976）の図を修正加筆
数値：源泉番号，A：1913（大正 2）年以降の掘削源泉，B：1913 年当時から現在（1975）まで利用されている源泉，C：1913 年当時は自噴していたが，1974 年には休止源泉．

図 17　温泉場・湯元通りの源泉井（2006 年 著者撮影）
鉄骨やぐらは主に定期的に行う井戸掃除（源泉井孔内のスケール除去）用

この為，ままねの湯（標高 112 m）付近の温泉井の静水面（動力ポンプ稼働前の水面）は昭和 20（1945）年頃には温泉場全体が停電になるとわずかに自噴していたと昭和 50（1975）年頃に温泉関係者が語っていたことから藤木川の河床面付近にあったが，昭和 30 年になると河床面下 5 m，昭和 45（1970）年に 60 m 程，1985 年には 75 m 程となり，ままねの湯（第 56 号）ではその孔底の深度 71 m（標高 41 m）より低下している（図 19）．この為，各源泉所有者はさらに増掘し，より強力なポンプで湯量の確保に努めている．

ままねの湯では昭和 13（1938）年に井孔内の浚渫（しゅんせつ）を行われているが，昭和 15（1940）年頃には自噴を停止したようである．中の湯の第 58 号（標高 104 m）は深度 118 m（孔底標高-14 m）まで掘削されたが，昭和 6（1931）年に 18 L/分（61.5℃），昭和 12 年に 9 L/分（60℃）に半減し，その後に枯渇したようである．

神奈川県は明治 44（1911）年に「温泉地区取締規則」を定め，試掘，場所，深度等の報告（神奈川縣，1911），そして昭和 4（1929）年にさらに温度，湧出量，泉質等の登録等（神奈川縣，1929）も定め，各地域毎に温泉台帳を作成して個々の源泉に番号を付けている．例えば，ままねの湯は湯河原源泉番号第 56 号である．下の湯（土肥村共有温泉）は湯河原温泉台帳に記載されていないことから掘削されることなく自然湧泉のままで昭和 4 年以前に消えたようである．

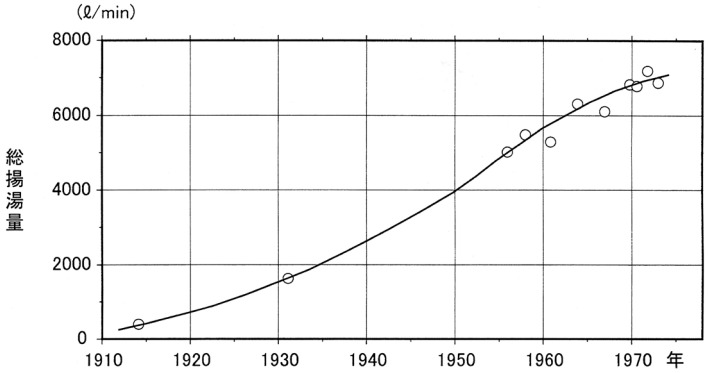

図 18　湯河原温泉の総湧出量の経年変化（大山・大木，1974）

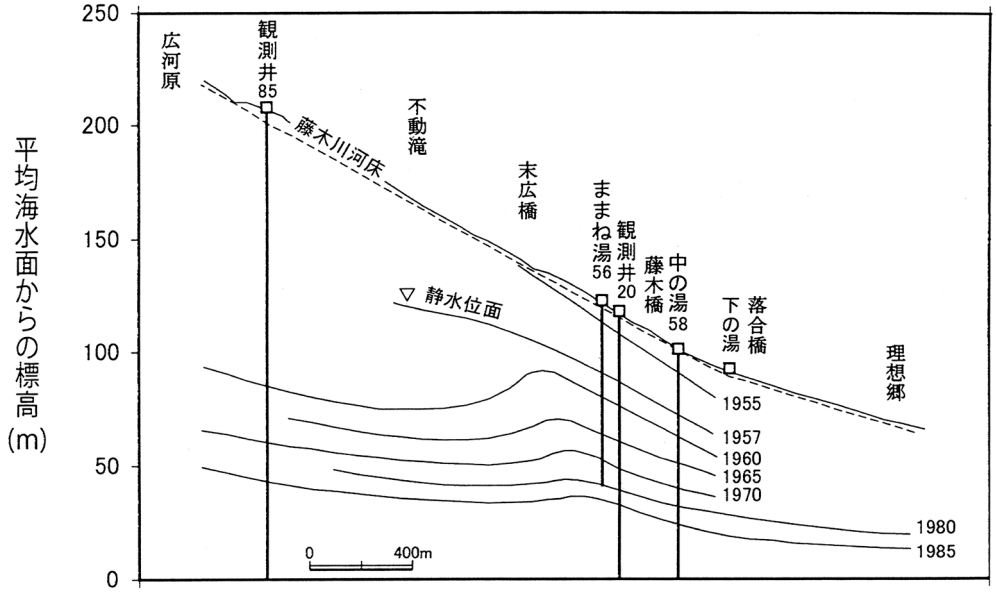

図 19　湯河原温泉の静水位の経年変化，大山（1994）の図を修正加筆

湯河原温泉では，源泉井よっては月に一回以上（主に高温泉）の頻度で孔内スケール除去（井戸掃除）が行われている．その際は温泉揚湯を止めるので孔内の温泉静水位の測定が出来る．源泉井戸掃除業者と連絡を取りながら調査したのが図 19 の静水位の経年変化である．昭和 25（1950）年頃からの温泉開発は源泉の密集している温泉場周辺および藤木川上流の不動滝付近にかけて活発に行われた．図 19 から，その影響により，温泉水位がままねの湯付近を極大としながら温泉水位が低下を続けていった状況をみてとることができる．水位の極大が経年的にままねの湯付近にみられることは，そこが地下深部からの温泉湧出の主要な場所であることを示唆しており，常に水圧が高いため温泉が自然湧出していたのであろうと推察される．

ままねの湯の源泉は湯河原温泉地の発展に伴う温泉水位の低下によって枯渇したが，今日も浴槽には隣接するかつて自噴井であった上野屋旅館敷地の第 22 号源泉から揚湯（1985 年調査）されている泉温 85℃，pH 8.0，成分総計 1.97 g/L，ナトリウムイオン 0.38 g/L，カルシウムイオン 0.16 g/L，

塩素イオン0.61 g/L，硫酸イオン0.55 g/Lなどの含石膏-弱食塩泉（神奈川県温泉地学研究所，1997）が供給され，湯治や日帰り浴等の人々に利用（図20）され，この湯を18L（1斗）ポリ容器に入れて持ち帰る人も後を絶たないほどの人気である．

5.　湯河原温泉懐中湯たんぽの由来

温泉懐中湯たんぽは，明治30（1897）年代頃，湯治客が自宅での湯治に用いるため湯河原温泉を一升瓶や酒樽に詰めて持ち帰るのを見て，後に岩本屋旅館を創設した岩本権太郎氏が考え出したものである．その販売広告（図21）によると，種類は，銀製，真鍮ニッケル製，銅製，真鍮製，ブリキ製の5種類で，価格がブリキ製ウコン木綿袋箱入が25銭だが，銀製白袱紗（ふくさ）袋桐箱入がその80倍の20円である．金あるいは銀製のものを皇室に献上したようなことを聞いたと岩本屋二代目館主の岩本亀三（1902-82）氏の末弟の岩本十太郎氏（三島市ロータリクラブ元会長）が語っていた．

温泉懐中湯たんぽの容器は小型なので外出や作業をする時に重宝である．この温泉湯たんぽは湯河原温泉のお土産として喜ばれ（塩井，1957），10個，20個と買って帰る客もいたという．温めれば何回でも使える．また，切傷，打撲，火傷の時にはハンダ付けしてある小穴を破り，この湯たんぽの薬湯水で消毒することを推奨していた．

温泉懐中湯たんぽは大分県別府温泉に商標登録「温泉湯之花懐炉」，鳥取県岩井温泉に「岩井温泉ゆたんぽ」，静岡県熱海温泉に「あたみゆたんぽ」等もあった．大きさはいずれも直径10～12 cm，厚さ2～3 cmであるが，熱海温泉や岩井温泉のは楕円形をしている（伊藤，2008）．これらは湯河原温泉湯たんぽに触発されたものか，それとも独自のものなのかは定かでない．

湯河原温泉懐中湯たんぽの製造は昭和15（1940）年頃に止めている．その要因は供給源であるままねの湯の自噴の枯渇によるものと考えられる．湯河原温泉はその後も薬湯として人気であり，四代目館主の岩本寿一氏が湯河原温泉懐中湯たんぽの再現を1990年頃に試みたが，職人が型を造るのに難色を示し，また使用者が火傷した場合のことを考て断念したとのことである．

図 20　ままねの湯旅館（2021年 著者撮影）

図 21　温泉懐中ゆたんぽ広告，提供 岩本寿一

6.　湯たんぽの語源

湯たんぽの“たんぽ”は漢字で「湯婆」と書き，唐音から転用されたものである．“湯”は“タン”，“婆”は“ポ”と発音する．従って，湯たんぽは「湯湯婆」となる．湯が二つも連なる語句の由来は次のようである．

湯たんぽが室町時代に中国から日本に入ってきたと考えられている．湯たんぽの初出の文献は季弘大叔による室町時代中期の文明 18（1487）年の『蔗軒日録（しゃけんにちろく）』である（伊藤，2007）．広まったのは江戸時代の元禄年間（1688～1703）である．日本では“タン”が“湯”だとわからず，たんぽ（湯婆）にもう一つ“湯”を重ねて“ゆたんぽ（湯湯婆）”と呼んだのが始まり（立木，1975）だという．

ところで，「湯婆」の“婆”は辞書によると年取った女性とあるが，中国では母や妻の意味がある（諸橋，1989）．中国では冬の寒さをしのぐため，母や妻のぬくもりの代わりに湯を入れた容器を寝床に置いて，これを“お湯の母”“お湯の妻”だから湯婆といった．そういえば落語で“なんで結婚したかって，冬の独り寝は寒いからよ”という台詞を聞いたことがある．

湯河原温泉はかつて「湯河原の湯」と言っていた．湯は中国では真水の温水を指すが，日本では草津の湯，箱根の湯，別府の湯のように温泉の意味を持っている．そうすると湯たんぽが漢字で「湯湯婆」ならば，温泉湯たんぽは『**湯湯湯婆**』と湯が三つも連なるのかなと考えたりする．

7.　終わりに

湯河原温泉は万葉の時代からの歴史をもち，特に切傷や打撲に効能のあることなどから好まれ，江戸時代には江戸市内に運搬され，薬湯として販売された．しかし，湯河原は山間の僻地で交通も不便なので浴客が少なかった．明治時代になると陸軍の傷病兵の療養地としての評判と鉄道の整備で多くの人が湯治などで訪れるようになった．その数は明治 10（1877）年代に 1,700 人程の年間宿泊者数が大正 14（1925）年に 10 万人を超え，昭和 17（1942）年には 47 万人に達している．湯治客の中には湯を持ち帰る人もいた．こうした状況の中で薬湯の温泉懐中湯たんぽが考え出され，そして湯河原のお土産として好評であった．しかし，湯河原温泉懐中湯たんぽは湯河原温泉地の急速な発展過程の中で生まれ，そして増大した温泉採取に伴う水位低下による自噴泉の消滅と共に消えてしまった．

湯河原温泉懐中湯たんぽ発祥の岩本屋は残念ながら道路拡張に伴い平成 23（2011）年に旅館業を閉じてしまった．しかし，同所は改築して今では「珈琲・軽食　岩本屋」になり，店内に明治時代の湯河原温泉地の絵地図，湯河原温泉懐中湯たんぽや大正・昭和時代の旅館などの写真，および解説が展示されている．コーヒーや軽食をしながら古き時代の光景を偲ぶことができる．

謝　　辞

本報のきっかけとなったのは岩本屋旅館第三代目館主の故岩本昭司氏と妻マツ氏の話と資料によるもので，その後，第四代目元館主の岩本寿一氏に教えをいただいた．元陸上自衛隊衛生学校研究部資料室長の山田一郎氏には日本軍の温泉療養について，共立大学名誉教授の伊藤紀之氏には湯たんぽに関する論文，上野屋旅館主の室伏常夫氏には資料を，井戸管理者の渡辺　守氏には井戸について教えをいただいた．「温泉科学」編集委員長の長島秀行氏と匿名の査読者 2 名の方には大変有益な意見を頂いた．これらの方々に記して感謝いたします．

引用文献

足柄下郡教育委員会（1972）：足柄下郡史，名著出版，310 p.
蘆田伊人編集（1980）：新編相模国風土記稿　第二巻，雄山閣，394 p.
熱海市史編纂委員会（1968）：熱海市史 下巻，熱海市役所，805 p.
板寺一洋（2021）：将軍は沸かし湯に入ったか？～献上湯のはなし～，観測だより，通巻第 71 号，11-14，神奈川県温泉地学研究所.
伊藤紀之（2007）：湯たんぽの形態成立とその変化に関する考察Ⅰ，共立女子大学家政学部紀要，**53**，25-32.
伊藤紀之（2008）：湯たんぽと足温器，骨董縁起帳，2008 春夏，15-9.
牛山幽泉（1910）：湯河原温泉療養誌，渡邊助次郎，148 p.
大木靖衛・荻野喜作・長塚縒子・広田　茂・小梶藤幸・高橋惣一・杉本光夫（1963）：湯河原温泉調査報告，神奈川県温泉研究所報告，1-39.
大山正雄・大木靖衛（1974）：湯河原温泉の水位の変遷，神奈川県温泉研究所報告，**6**，1，31-46.
大山正雄（1994）：湯河原温泉の水頭の特性，神奈川県温泉研究所報告，**25**，2，23-35.
加藤留蔵（1895）：相州土肥 湯河原温泉誌，武相案内誌，390-397，神奈川県図書館協会.
神奈川県衛生部（1974）：昭和 49 年 3 月 温泉実態調査報告書 湯河原温泉，67 p.
神奈川県温泉地学研究所（1997）：資料集，神奈川県温泉地学研究所報告，**28**，2，280 p.
神奈川縣（1911）：神奈川縣令第五十三號，神奈川縣広報第 1636 號，神奈川縣廳.
神奈川縣（1929）：神奈川縣令第六號，神奈川縣広報，No. 223，神奈川縣廳.
久野　久（1972）：箱根火山地質図説明書，大久保書店，52 p.
熊澤光芳（1968）：湯河原温泉略史，湯河原町役場，24 p.
小林儀一郎（1914）：神奈川県湯河原温泉調査報文，地質調査所報告，No. 48，69-84.
三枝正裕（1993）：温故知新，桜医会出版部.
塩井　武編集（1957）：日本温泉事典，日本交通公社，975 p.
「写真が語る湯河原今昔」編集委員会（1976）：写真が語る湯河原今昔，湯河原町立図書館，298 p.
高橋正知（1913）：戦役ノ病院，東京第一衛生病院沿革略史，8-14.
高城　喬（1986）：横須賀鎮守府管下収療施設の拡充，海軍医務・衛生史，第三巻，47-48，柳原書店.
立木惇之（1975）：世界の風呂と日本の温泉―伝承と資料― 6，温泉，43 巻 7 月号，28-31.
内務省衛生局（1985）：日本鉱泉誌 中巻，132-136，内務省衛生局（1886），橘書院.
内務省衛生試験所（1929）：日本鉱泉分析表，衛生試験所彙報，34，240 p.
西川義方（1932）：温泉と健康，南山堂書店，444 p.
平野富雄・大山正雄・粟屋　徹・大木靖衛（1976）：湯河原温泉の地下水位低下と温泉の冷地下水化，神奈川県温泉研究所報告，**7**，2，53-68.
副島圭三（1896）：明治廿六年東京衛戍病院治療上之記事，副島圭三，308 p.
諸橋轍次（1989）：大漢和辞典 巻 3，大修館書店，1128 p.
八亀広藏（1983）：随想，神奈川県温泉誌，7-8，神奈川県衛生部.
山崎晴雄（2000）：酒匂川河谷と箱根火山，日本の地形 4，関東・伊豆小笠原，126-134，東京大学出版会.
山中襄太郎（1978）：地名語源辞典，校倉書房，459 p.
湯河原厚生年金病院 50 年史編集委員会（1996）：湯河原厚生年金病院 50 年史，湯河原厚生年金病院，197 p.
湯河原町（2019）：湯河原町統計要覧 令和 3 年版，68 p.

湯河原町教育委員会（1975）：湯河原，湯河原町教育委員会，108 p.
湯河原町教育研究会（1971）：湯河原の交通，郷土湯河原資料編，63-121.
湯河原町町史編さん委員会（1987）：湯河原町史　全五巻，湯河原町.
湯河原町町立図書館（2013）：湯河原町歴史年表，湯河原町立図書館，51 p.